

草加西部地区

こんなまちになったらいいな

第4回

地区別懇談会 の記録

日時 : 令和4年11月25日(金) 18:30~21:00

場所 : 氷川コミュニティセンター

参加者数 : 21名

プログラム

1. 開催にあたって
2. 意見交換
ワーク① : プロジェクトの内容を確認しよう・具体化しよう
ワーク② : モデルプロジェクトの候補選定
3. 検討結果の発表
4. モデルプロジェクトの選定
5. 閉会・次回のご案内

当日の様子




当日の記録

- 第3回地区別懇談会と同様に、5班に分かれてグループワークを行いました。
ワーク①では、第3回地区別懇談会の検討結果を元に各プロジェクト内容を具体化しました。
ワーク②では、これまで話し合ってきたプロジェクトの中から、コミュニティプラン策定前に地域でトライ（試行）するモデルプロジェクトを2つ選ぶために、その候補となるプロジェクトを各班から1つずつ選出しました。

各班で検討したプロジェクト	モデルプロジェクト候補
<u>A班</u>	
様々な社会課題の解決に向けた議論の場づくり	誰もが気軽に集まれる場所 が地域にあることが大切！
公園や空地を活用した『子ども』×『防災』イベント	
<u>B班</u>	
ボランティアの仕組みづくり	
リタイア世代による子どもスポーツ教育の支援	気軽に参加できて、目的 も分かりやすい！
安全なまちを目指した地域の見守り運動	
<u>C班</u>	
子育て世代を支えるコミュニティカフェ	
草加西部地区の魅力 PR	コミプラで進めるべき 新しい取組である！
母国の文化や言葉の交流による関係づくり	
<u>D班</u>	
多世代交流・支えあいの居場所づくり	スモールスタートから徐々に 取組を拡げていける！
公共空間を活用した定期的なマルシェ	
各町会の交流に向けた大盆踊り大会	
<u>E班</u>	
各所の緑化運動を展開したウォーキングルートづくり	
農がある風景を生み出すための農業機会の創出	プロジェクトの内容が具体的 で、取り組みやすい！
地域の PR に向けたご当地キャラづくり	


- その後、ワーク②で各班から選ばれたモデルプロジェクト候補の中から、ひとり2票を持ち、全体での投票を行いました。
一回目の投票では、C班のプロジェクトが最多得票となりモデルプロジェクトの1つ目に出しました。また、B班とE班のプロジェクトが10票で同率2位だったため、再度、決戦投票を行いました。

一回目の投票結果

	モデルプロジェクト候補	得票数
<u>A班</u>	様々な社会課題の解決に向けた議論の場づくり	★★★★
<u>B班</u>	安全なまちを目指した地域の見守り運動	★★★★★★★★
<u>C班</u>	 草加西部地区の魅力 PR	★★★★★★★★ ★★★★
<u>D班</u>	多世代交流・支えあいの居場所づくり	★★★★★★★★
<u>E班</u>	各所の緑化運動を展開したウォーキングルートづくり	★★★★★★★★



決戦投票の結果

	モデルプロジェクト候補	得票数
<u>B班</u>	安全なまちを目指した地域の見守り運動	★★★★★★★★
<u>E班</u>	 各所の緑化運動を展開したウォーキングルートづくり	★★★★★★★★ ★★★★

- 投票の結果、草加西部地区のモデルプロジェクトとして、以下の2つが選ばれました。
この2つのプロジェクトは第5回地区別懇談会開催の前に試行し、実際にプロジェクトを進めていくなかで得られた成果や課題をコミュニティプランに反映していきます。

草加西部地区のモデルプロジェクト

草加西部地区の魅力 PR

各所の緑化運動を展開したウォーキングルートづくり

- 次ページ以降では、ワーク①の検討を踏まえて整理した各プロジェクトの内容をご紹介します。

ワーク①の検討を踏まえて整理した各プロジェクト

テーマ：つながり・支えあい

A班で検討！

様々な社会課題の解決に向けた議論の場づくり

目的

- ・地域の中に気軽に立ち寄れる場所を増やすことで、様々な地域における生活上の課題を、身近な居場所での交流や相談から、悩みや問題の解決の糸口につながれるようにしていきます。
- ・空き家などを活かした居場所作りによって、地域の使われていない場所の発掘と活用につなげていきます。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

活動メンバーを集めて、地域の中の居場所に関するニーズを探る

- ・地域に関わりのある集まり等を通じて、居場所づくりや空間活用・地域コミュニティなどに関心のあるメンバーを集める。
- ・活動メンバーを中心に、地域の中で居場所を必要としている人や、地域の中で困りごとを抱えていたり孤独を感じている人などがどの位いるのか、現状を把握する。

参考情報

市内では「あきちゃんち」や「さかえーる」などの事例がある

💡 STEP 2

カフェのように気軽に集える居場所を目指して、使えそうな場所を探す

- ・カフェの様に気軽に行ける場所を目指して、市内外の空き家活用や居場所づくりの事例を調べる。
- ・メンバーや関係者の持つつながりや情報網をいかして、地域の中で候補となりそうな場所や物件を探す。地域の中にある公共施設（氷川コミュニティセンターなど）の活用も検討する。また合わせて、多様な参加の形の1つとして、オンラインでの開催や参加の方法も検討する。

居場所の企画・運営に協力してくれる仲間を増やす

- ・活動に協力してくれそうな人がいそうな地域内の団体・組織などに働きかけて、協力者を募る。またその中で、「無理なくできる事・得意な事を中心に協力してもらおう」、「協力してもらったことがどの位役に立ったかを伝える」など、協力者のモチベーションが継続・向上するような工夫をしていく。

💡 STEP 3

居場所づくりの事業としての全体像をまとめる

- ・居場所開催の頻度（常設か、隔週かなど）や、より幅広い人材（地域の大学生等）を巻き込んだ形での運営・開催について検討する。
- ・活動が将来的に継続的なものになるように、場所の使用料や協力者への報酬などを含め、どの様にプロジェクト全体の採算性を確保するかを検討する。

必要なモノ・コト

活動者の意欲が続くような工夫を考える

💡 STEP 4

居場所の運営を実際に行う

- ・実際に地域の中で、誰でもふらっと立ち寄れて、気軽におしゃべりや交流ができるような居場所を運営する。
- ・パンやクッキー・野菜・コーヒーなどを販売するなど、通りすがりの人が気軽に足をとめて立ち寄れるような仕掛けをして、人を呼び込む。

アイデア！

何かを売る・販売する（飲食系など）と、立ち寄りやすい場所になる

当日挙げたその他のご意見やアイデア

- ・空き家などの場所を見つけるには、地元ならではのネットワークや口コミ情報が重要になりそう。
- ・採算性等を考えると、居場所は常設にこだわらずに週末の2～3時間限定で開いてもよいのでは？
- ・実際に地域で居場所づくりを経験したことのある人の協力や助言を得られるとよい。

ボランティアの仕組みづくり

目的

- ・ボランティアに参加しやすい環境をつくり、ボランティアへの参加者人口を増やしていきます。
- ・参加者人口を増やすことで、活発な地域活動を推進していきます。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

アイデア！
参加しやすいボランティアの選択肢を増やすことで、気軽に参加ができる雰囲気ができる

ボランティア団体の現状と課題、要望を調査

- ・活動するうえでの問題点と課題、どのような方にボランティア活動に参加してほしいかなどを現在、活動している団体にヒアリングし、把握する。

気軽に参加しやすいボランティア活動を検討

- ・気軽にボランティアに参加しやすいボランティア活動とは何かについて、アイデア出しをする。
- ・既存のボランティア活動に参加のハードルを下げる工夫を加える。
- ・他のプロジェクトと連携しながら、参加しやすいボランティア活動を増やしていく。

💡 STEP 2

アイデア！
ボランティアをすると「ボランティアをしてもらえる・呼べるポイント(サービスと交換)」とすると良いのでは！

ボランティア活動が持続するためのプラットフォーム・仕組みを作る

- ・いつ、どこで、何人程度ボランティアを受入れたいなど、募集要件などがわかるプラットフォーム(ボランティアタウンワーク)を作る。
- ・ボランティアを継続させるために、ボランティア参加者のメリットとなる仕組みを作る。例えば、ボランティアポイント制度を導入し、地域通貨のような形で活用するなど検討する。

ボランティア活動を周知・マッチング

- ・プラットフォームを活用しながら、STEP 1 で検討したボランティア活動を周知し、ボランティア活動をマッチングする。

💡 STEP 3

受入れ側・参加する側のそれぞれの問題点・課題を把握

- ・ボランティア活動の受入れる側・参加する側のそれぞれの問題点・課題を把握し、プラットフォームや仕組みに反映させる。

当日挙がったその他のご意見やアイデア

- ・既存団体でのボランティア参加は、ハードルが高い。ふらっと気軽に参加してもらえる工夫が必要では？
- ・人を集めるための広報活動(広報誌、SNS等の活用)が必要では？
- ・ネットワークづくりと人材発掘を同時並行で行うべきでは？

リタイア世代による子どもスポーツ教育の支援

目的

- ・指導者が不足していて、部活動ができていない子どもたちのために、地域でスポーツ教育ができる環境を作っていきます。
- ・高年者などがスポーツ教育に関わることで、生きがいつくりにつなげていきます。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

子どもたちのスポーツ教育のニーズの把握と担い手を発掘する

- ・小中学校、教育委員会などの協力のもと、子どもたちのスポーツ教育のニーズを把握する。未就学児のニーズも把握する。
- ・子どもたちに運動を教えたい高年者などの担い手を地域の方々と連携しながら、発掘する。

💡 STEP 2

子どもたちが安心して遊びや運動をするための環境を考える

- ・高年者が子どもたちの運動や遊びを見守り・支援することを目的とした「運動見守り支援員」を公園などに配置する。
- ・STEP 1の内容を踏まえて、子どもたちの対象年齢や支援内容などを検討する。
- ・安全管理の観点から教育施設などとの連携が困難な場合は、公園などで取組を実施することも検討する。使用する場所（公園など）の許可や、実際に活用できる時間帯などの具体的な調整を行う。

💡 STEP 3

運動見守り支援員を募集する

- ・企画内容をもとに、要件を定め、STEP 1で発掘した方々を中心に運動見守り支援員を募集する。

💡 STEP 4

取組の周知・実行する

- ・町会や学校、地域活動団体等に協力を仰ぎ、取組を周知する。
- ・対象によって、支援内容が異なることが予想される。未就学児や小学校低学年などを対象とする場合は、運動見守り支援員が走り方や簡単なボール遊びなど簡単な運動を教える。

必要なモノ・コト
実施するにあたっての、安全管理（ケガ等の予防）を事前に検討する

💡 STEP 5

各種団体との連携模索する

- ・取組を実行し、地域に根付かせた後、各種団体との連携を模索する。

当日学がったその他のご意見やアイデア

- ・教育施設との連携は、最初はハードルが高いのではないかな。できるところから手を付けては？
- ・スポーツを教えるとなるとハードルが高い。子どもたちだけで遊ばせるのは不安といった声もあるため、子どもたちの遊び・運動を見守るところから始めてはどうか。
- ・未就学児などを対象にすることも考えられるのではないかな。

草加西部地区の魅力 PR

目的

- ・草加西部地区にある、埋もれたまちの魅力を地区の住民や地区外居住者向けに PR し、草加西部地区のまちを知ってもらうことで、居住者や来街者が増えてまちのにぎわいが生まれます。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

地区の魅力を PR する方法を検討する

- ・活動の中心メンバーと賛同者で、地区の魅力を PR する方法について検討する。例えば、全年齢を対象とした広報誌の発行と、若者向けの SNS 開設など。
- ・PR する内容は、より深く知ってもらえるように、写真をメインに、その場所にまつわるエピソード等をセットで発信する方法が考えられる。

アイデア！
毎回テーマと対象を変えて、対象に合った内容で PR することも！

💡 STEP 2

PR に使用する地区の魅力を探す・集積する

- ・歴史的な場所やモノ、お店、街並み、日常の風景など、PR したい地区の魅力を様々な方法で収集する。例えば、地図を見ながらアイデア出し、まち歩きを企画して写真撮影、地区にまつわる文献調査など。
- ・また、適宜収集した内容に関係する方やお店の方へのヒアリングを通して、その場所にまつわるエピソード等を聞き出し、記録しておく。
- ・収集活動を継続的に行うことで、PR に使用する「地区の魅力」の情報を集積する。

💡 STEP 3

情報を整理し、PR に向けて準備する

- ・STEP 2 で集積した情報をもとに、PR 内容やテーマを検討し、PR 用に情報を整える。
- ・STEP 1 で検討した PR の方法に応じて、広報誌の作成、SNS (Instagram) を開設する。
- ・広報誌は、デザインのスキルがある方に協力を依頼しつつ、メンバーの誰もが編集・印刷・発行しやすいフォーマットとしていくことも検討する。SNS については管理・投稿ルールを決めるなど、誰もが利用しやすい PR ツールとなるよう環境を整備する。

アイデア！
地域の活動主体 (写真部) や写真が趣味の方に協力してもらう！

地区の魅力を発信する

- ・継続的な広報誌の発行、SNS への投稿を行い、地区の魅力を発信する。
- ・広報誌は、多くの方の目に留まるように、地区内のお店や公共施設に設置してもらう等の工夫をする。

💡 STEP 4

一緒に活動するメンバーを募集する

- ・プロジェクトに興味関心を持った方や、大学生、写真が趣味の方、文章が得意な方等を活動メンバーに迎え入れながら、徐々に活動を広めて定着させていく。

アイデア！
「SOKA LOCAL STORY」など、既存メディアに協力いただくことも！

当日学がったその他のご意見やアイデア

- ・最初は地域の人々におすすすめスポットを教えてもらうと良いのでは。
- ・町会は人集め、大学生や若い方はデザインなど、それぞれの長所を生かされると良い。
- ・多世代に PR するためには、デジタルとアナログ、両方で周知していく必要がある。

母国の文化や言葉の交流による関係づくり

目的

- ・市内に居住する外国の方とその他の地域住民が、共通のテーマで交流できる場をつくります。
- ・その中で、生活上の困り事や課題等を聞き取り、フォローを行います。
- ・この2つにより、外国の方もその他の地域の方も、暮らしやすい地域となります。
- ・また、平常時からの交流により、災害時のコミュニケーションもスムーズになります。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

交流する方法やテーマを具体化する

- ・円卓会議を通じて、中心メンバーと賛同者で、外国の方と地区住民が交流する方法やテーマを検討する。その際、食・音楽・昔遊び等、どの国でも共通である「文化」を中心に検討する。
- ・また、事前に市や公的機関が所有するデータ等の閲覧、関係団体等へのヒアリング等により、外国の方の困り事等に関する実態を把握しておく。

アイデア！
獨協大学の留学生等に協力してもらえると良いかも！

アイデア！
実施場所として使えるような施設等を考えておきましょう！

💡 STEP 2

協力者を集めてイベントを企画する

- ・外国の方との接点や専門知識等がある方など、企画・運営に関わってもらいたい個人や団体に声掛けし、協力者を集め、STEP 1のメンバーと協力者で役割分担をしながら企画を具体化する。

💡 STEP 3

イベントを周知し、参加者を募る

- ・まずは知人の外国人や外国人コミュニティへの周知から開始する。その際、イベントの主旨や内容をわかりやすくまとめたチラシ等を多言語で作成するなど、周知する方法を工夫する。
- ・まずはコアとなる方に参加してもらい、そこから徐々に参加者の輪を広げる。

💡 STEP 4

「文化交流」をテーマにイベントを開催する

- ・STEP 2で企画した内容を踏まえ、まずは小さなイベントから開始する。
- ・イベントの中で、適宜参加者から日頃の生活での困り事等を聞き取る。
- ・また、プロジェクトへの興味関心が高い方には、次回以降のイベントへのお誘いや、企画・運営への協力依頼をして、参加者と企画メンバーの輪を広げる。

アイデア！
獨協大学の留学生にも参加してもらえると楽しいかも！

💡 STEP 5

外国の方の困り事解決に向けて対応する

- ・イベントの中で把握した生活上の困り事等について、解決方法を検討し、適宜市の所管課や関係団体等を紹介する等、適切な情報提供を行い解決に導く。

当日挙げたその他のご意見やアイデア

- ・楽しい雰囲気で開催できれば、自然と人が集まってくると思う。雰囲気づくりは大切である。
- ・以前獨協大学で開催されていた「草加国際村一番地 国際交流フェスティバル」が参考になるのでは。
- ・獨協大学の留学生には、外国語の先生として協力してもらえると良い。

公共空間を活用した定期的なマルシェの開催

目的

- ・コロナ禍でコミュニティが分断され、外出しない高年者が増えています。
- ・身近な場所にマルシェを開き、外に出て人が集まるきっかけをつくり、地域の交流を再構築します。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

ターゲットとする地域を検討する

- ・円卓会議を通じて活動の中心メンバーを集める。草加駅から遠く買い物が困難なエリアを対象とし、まずはバイパス以西の西町周辺をターゲットとして検討する。(西町立野町会、西町第一町会、西町第二町会)
- ・マルシェを開く場所は、コミセン等の公共施設や公園、路上販売、駐車場の活用などを検討する。

必要なモノ・コト

- ・行政による意向調査等のサポート

マルシェのニーズを把握する

- ・農家の協力者を得るためには一定の収益を見込む必要があり、実際に身近な買物に困っている方はいらぬかどうか、マルシェの需要があるかどうかニーズを把握する調査を行う。
- ・例えば対象エリアの関係町会にヒアリング調査を行い、地域の方の困りごとや買い物ニーズについて確認する。

必要なモノ・コト

- ・協力者の動機付けとなる採算性の確認

💡 STEP 2

マルシェの協力者を募集する

- ・チャヴィベルトさんのように有機野菜を直売している地元のお店や農家さん、地域周辺で野菜や果物の農園をやっている地元の方に協力を呼び掛ける。

必要なモノ・コト

- ・活動場所の確保と各種手続き(利用許可など)

💡 STEP 3

マルシェを開く

- ・対象エリア内の公共施設や町会会館、公園等でマルシェを開催する。他にも、移動販売や路上販売、駐車場等の活用も検討する。
- ・公共施設の予約や人的支援など最初は行政に協力してもらい、利益が出てくれば自主運営に移行していく。

💡 STEP 4

新たなニーズにも対応し、マルシェを拡大していく

- ・一定の集客と収益が出れば定期的にマルシェを開催する。マルシェを継続し「また会えたねっ」と言い合える場をつくる。更に他の町会にもエリアを拡大し、交流の輪を広げていく。
- ・防災キャンプのイベントにマルシェとして参加するなど、「交流の再構築」のその先の「新たな出会いとにぎわいの場づくり」にも展開していく。

当日挙げたその他のご意見やアイデア

- ・この取組の目的には「買物が不便な方のサポート」と「交流・にぎわいづくり」の2つの側面がある。
- ・交流やにぎわいを取り戻すことも大事な目的だが、交流の場を新しく生み出すことも大事である。
- ・防災キャンプにキッチンカーを集め、そこでマルシェを開いたり出張子ども食堂を出店してはどうか。

各町会の交流に向けた大盆踊り大会

目的

- ・子ども達が自分の住んでいる町を自慢でき誇れるように、顔の見える範囲での身近な集まりでお祭りやイベントを実施します。
- ・高齢化など課題を抱える町会どうしが協力しあうことで、地域交流を促進し、住みよいまちづくりにつなげます。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

必要なモノ・コト
・町会と費用負担や人の確保などの事前調整

各町会から活動メンバーを募集する

- ・これまでは各町会がそれぞれの場所で盆踊りをやっており、各町会にお祭りのノウハウを持つ人も揃っているため、円卓会議を通じて、独自の大盆踊り大会への協力を各町会に呼びかける。

💡 STEP 2

お祭りイベントを企画する

- ・各町会からノウハウを持つ人を集め、屋台の出店、やぐらを組んでの盆踊りなど、各町会のお祭りの特色を合わせたイベントを企画する。

イベント規模にあわせて、開催時期や会場を検討する

- ・開催時期は秋、9～10月頃とする。西部地区の中心でお祭りができる広い場所として、西町小学校や草加小学校を候補地とする。
- ・はじめは2～3町会からはじめ、いずれは地域内の全町会が集まる大盆踊りのイベントしていく。

他のプロジェクトにつながるキーマンを発掘する

- ・町会合同の盆踊り大会の企画検討を通して、様々なノウハウを持つ協力者とのつながりをつくり、円卓会議でのその他プロジェクトの展開にもつなげていく。

💡 STEP 3

町会合同の盆踊り大会を開催する

- ・1日～2日に分けて、昼間は屋台や子どもが遊べるお祭りイベントを行い、夕方からはやぐらを囲んで盆踊りを行う。
- ・広間のお祭りイベントや屋台の出店は、地域の子どもや親子、高年者の交流の場となるよう、町会メンバーや地元のお店、活動団体を中心に実施する。

必要なモノ・コト
・スモールステップからはじめる！

💡 STEP 4

住民が誇れる大盆踊り大会へと拡大する

- ・いずれは地元の草加神社にも協力いただき、盆踊りの場を中心に、神社のお神輿が2、3日かけて街全体を回れるような大イベントに育てたい。

当日拳がったその他のご意見やアイデア

- ・コロナ前までは各町会ばらばらでやっていた催しを一緒にやることで、化学反応が生まれる。
- ・子ども向けの小規模なお祭りからはじめて、次のステップで盆踊り大会をやってもよい。
- ・話が大きすぎても大変になるので、最初は神社のお祭りやお神輿は巻き込まなくてもよい。

子育て世代を支えるコミュニティカフェ

目的

- ・目的無しにふらっと立ち寄れて、「あそこへ行けばいつも何かやっている」という場所をつくります。
- ・それにより、子育てに悩む世代、孤立する高年者、若者、定年退職後の世代など、世代問わず多様な方の居場所が確保されます。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

「誰でも気軽に立ち寄れる居場所」のイメージを共有する

- ・中心メンバーと賛同者で、最終的な場のイメージについて話し合い、共通認識を持つ。

アイデア！

ヒアリングでニーズを把握した上でテーマを決めても良いかも！

アイデア！

飲食店は、空き時間を使わせてもらえるかも！

💡 STEP 2

居場所づくりに向けたイベントを企画する

- ・プロジェクトの第1歩としての小さなイベントの試行に向けて、STEP1のメンバーでイベントのテーマと内容を検討する。その際、食・本・音楽・写真など、世代を問わず参加できるテーマを検討する。
- ・会場としてカフェ等のお店やコミュニティセンター等の公共施設が考えられるが、いずれも若い世代の参加を促すために、おしゃれで居心地が良い雰囲気づくりを大切にする。

💡 STEP 3

協力者を集めてイベントを具体化し、周知する

- ・イベントのテーマと内容を踏まえ、協力いただきたい個人や団体への声掛けを行い、協力者を集めてイベント内容を具体化する。その際、協力可能な曜日や時間帯、専門スキル等は人によって異なるため、適材適所で役割分担して進める。
- ・また、イベントチラシの作成やSNSの開設・発信等により、イベントの周知を行う。

必要なモノ・コト

イベントの内容にあわせて、参加費等も検討しましょう！

💡 STEP 4

イベントを試行する

- ・STEP3までの企画を踏まえ、小規模なイベントを試行する。その中で、参加者数や年齢層、属性、参加者の反応などを記録し、ニーズを把握する。
- ・なお、プロジェクトに興味関心がありそうな方へは、適宜声掛けをして仲間を増やしていく。

必要なモノ・コト

チラシのデザインやイベントの周知等が得意な方に協力してもらいましょう！

💡 STEP 5

誰でも気軽に立ち寄れる居場所づくりを進める

- ・イベントの試行を繰り返す中で、場所やイベント内容を徐々に絞り、「あそこへ行けばいつも何かやっている」という場所として認識されるようになる。
- ・最終的には場所を固定化し、誰でも気軽に立ち寄れる居場所ができあがる。

当日挙がったその他のご意見やアイデア

- ・小さな規模から始めるのは良いが、そのままプロジェクトが終わってしまわないように、目標を決めて計画的に進める必要がある。その点は非常に大切である。
- ・氷川児童センターではいつも何かしら行われている。そういった場所がもっと増えていくと良い。

多世代交流・支えあいの居場所づくり

目的

- ・孤立する子ども、子育てに悩む世代、高年者、多国籍の方などが、多世代でつながり、支えあえる居場所をつくります。
- ・子どもの幸せを中心に地域交流が広がるような、世代・国籍・文化を越えた居場所をつくります。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

ノウハウをもつ協力メンバーを募集する

- ・円卓会議のメンバー、知人、町会や商店会、活動団体等に声をかけをし、活動メンバーを集める。
- ・地域のみなさんがもっている特技や経験・ノウハウを持ち寄る。中心メンバーだけではなく、イベント単発でお手伝いいただける若い人や大学生も含めて広く募集する。

必要なモノ・コト

- ・吸引力があり、かつ参加のハードルの低い企画づくり

💡 STEP 2

できることから、交流の場を企画する

- ・取組を継続させるため、最初は無理なくできることから企画する。居場所に必要なのは人を集める吸引力であり、参加者を無理に集めず、集まったメンバーから関係性を広げていく。
- ・中心メンバーの得意分野に応じて、子どもの集まり、高年者の集まり、マルシェ、子ども食堂を企画する。

地域住民に身近なイベントの場所を確保する

- ・みんなが気軽に集まれる場所、子どもが歩いて来れる場所が望ましく、候補地として最初は氷川コミセンを活用する。
- ・コミセンのほかにも町会会館、小学校の空き教室等も活用したい。「平成塾」も学校を使用しており、空き教室を使った子ども食堂の事例もある。

必要なモノ・コト

- ・企画内容に応じた協力者の確保

💡 STEP 3

イベントの試運転からはじめ、徐々に地域に定着させる

- ・年に2～3回実施し、各世代向けに企画をかえて、最初は子ども・子育て世代向けのイベント、次は高年者向けとする。その先の多世代向けのイベントでは世代別のブースをつくるなど。
- ・野菜販売のマルシェの企画であれば、当番制にしたり場所を駅前に変えたりして、少しずつ活動の幅を広げる。「第二日曜日はそこで何かやっている」ような場として定着させていく。

必要なモノ・コト

- ・クラウドファンディングによる資金調達方法も検討する

💡 STEP 4

より身近な居場所づくりへと展開していく

- ・いずれは、みんなが気軽に集まれる場所、子どもが歩いて来れる場所で実施していきたい。
- ・一つ一つの規模が小さくても、毎週どこかに居場所があることを目指していく。
- ・活動の様子はSNSで発信し、少しずつ認知度と地域との関係性を高めていく。

当日学がったその他のご意見やアイデア

- ・世代によらず、月1回顔を出して、おしゃべりできる場所が少しずつ増えていくといい。
- ・ターゲットが広いので、女性受けしそうな場所にするとか、大学生が集まる企画等も考えないといけない。
- ・地域のハブとなる鍵は「子ども」。高年者カフェではなく子どもカフェにすれば多世代が集まる企画になる。

各所の緑化運動を展開したウォーキングルートづくり

目的

- ・住民の交流と憩いの機会を創出するために、地域の貴重な資源である農の風景や歴史的建物・店舗などを辿れる魅力的な歩行者空間にしていきます。
- ・歩行者空間を活用したイベントの開催によって屋外運動の機会を提供し、健康を促進していきます。

プロジェクトの内容

STEP 1

活動メンバーを集めて、地域資源の情報を収集する

- ・円卓会議を通じて活動の中心メンバーを集める。町会・自治会や関連組織を通じて、地域に精通した方や活動の趣旨に関心が高い方を探す。
- ・書籍やインターネット、市からの情報提供により、地域資源の情報を収集し、地図に落とし込む。

STEP 2

地域資源の発掘に向けたまち歩きを実施する

- ・STEP1で収集した情報を元に、対象エリアを決め、まち歩きを実施する。まち歩きでは、収集した地域資源の確認や、自然・寺社仏閣・店舗等の地域資源の新たな発掘、歴史等に関するヒアリングを行う。
- ・まち歩きは円卓会議や地域コミュニティを通じて、中心メンバー以外の参加者も広く募る。

必要なモノ・コト

- ・参加者募集のチラシ
- ・まち歩きに使う地図

地域資源を巡るウォーキングルートを作成する

- ・まち歩き結果や収集した地域資源の情報を地図に落とし込み、メンバー間で共有する。
- ・地図上で地域資源の取捨選択をし、地域資源を巡るウォーキングルートを作成する。

STEP 3

「地域資源・ウォーキングマップ」を作成する

- ・ウォーキングルートや、その他の自然・寺社仏閣・店舗、防災に関する情報を掲載した地域資源・ウォーキングマップを作成する。
- ・他地区のマップをデザインの参考にしながら、デザイン・編集に長けた地域の方と連携して作成する。

STEP 4

地域の緑化などにより魅力的な歩行者空間をつくる

- ・植栽の名前や解説を記したプレートやルートのご案内板、寺社仏閣の説明表示などを作成し、掲示することで、さらに魅力的な歩行者空間へと改良していく。
- ・ルートの休憩所となる公園や広場を憩いの空間とするために、管理者と協議を踏まえて、植物を植える。

ウォーキング運動を開催する

- ・作成したウォーキングマップを活用して、住民によるウォーキング運動を実施する。
- ・ウォーキング運動を通じて健康促進や住民同士の交流を図る。

当日学がったその他のご意見やアイデア

- ・コンフォール松原に向かう途中の道は、街路樹が植わっていて公園もあり、素敵な空間である。あのような歩行者空間は理想的である。
- ・生産緑地が防災協力農地になっているところもあり、その周知のためにルートに含めると有益なのでは。
- ・アートの要素として、水路上の路面や壁面に、子ども達にペイントしてもらおうと魅力的になると思う。

農がある風景を生み出すための農業機会の創出

目的

- ・若者、子どもが地域の身近な自然に触れ合う機会を創出します。
- ・農業の良さをPRし地域の農業の需要を高めることで新たな担い手を確保し、体験農園・貸し農園を始める手助けをすることで農地の宅地化を防ぎ、維持します。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

体験農園の協力者や場所の情報を集める

- ・現在貸し農園を運営している農家を中心に、円卓会議を通じて活動の協力者となる地域の農家を集め、活用できそうな農地の情報を集める。
- ・農家のコミュニティを通じて、体験農園の実施に向けた協力者を探す。

💡 STEP 2

体験農園の実施

- ・農地を活用して、地域の小学生と親に農業を体験してもらう。
- ・地域の若者や子どもたちに農業の良さをPRするとともに、自然との関わりを通じた豊かな体験の機会をつくる。

💡 STEP 3

体験農園・貸し農園として活用できる農地を増やす

- ・まずは手軽な体験農園、次に貸し農園と、段階を上げて農業に触れてもらうことで、農業の良さを実感してもらい、地域の農業の需要を高める。
- ・担い手不足で困っている農家や、宅地化されてしまいそうな農地の所有者に対して、体験農園・貸し農園の開業に必要なノウハウを共有し、農地活用の新たな選択肢を持ってもらう。

必要なモノ・コト
・農家に貸し農園を広める
窓口が必要

💡 STEP 4

農業を通じた新たなコミュニティづくり

- ・体験農園・貸し農園での活動を通して農家同士や、農業に関心がある人たちの新たなネットワークを構築していく。
- ・ネットワークを活用して、さらなる農地の活用方法を模索することや、担い手不足に困る農家と、本格的に農業を始めたい人とのマッチングの手助けをする。

当日挙がったその他のご意見やアイデア

- ・都市型の農業、地域に開かれた農業の魅力を伝えていくことで、農業者の仲間を増やしていけると良い。
- ・現状では農家の後継ぎをどうするかが大きな課題となっており、将来的に農地を残せるかどうかという意味でも、今がとても重要な時期になっている。
- ・重たいテーマであり、住民が一体となって活動できるようなことは少ないかもしれないが、働きかけをしていきたい。
- ・草取りなどを有償で行う農業ボランティアを、コミュニティプランを通して拡げていけないだろうか。

地域のPRに向けたご当地キャラづくり

目的

- ・日本や地域住民の個性を表現した、地域のご当地キャラクターを作成し、その活動を通して多世代交流を図ります。
- ・地域住民が考案したキャラクターを活用して地域の魅力・情報を発信することで、地域への愛着を育み、にぎわいづくりにつなげます。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

活動の中心メンバーを探す

- ・円卓会議を通じてキャラクター作成に向けた活動の賛同者を集める。
- ・STEP2の公募に向けたコンセプト決めなどは少数精鋭で行い、その後の状況に応じて協力者を集める。

💡 STEP 2

公募方法・選定方法を検討する

- ・まずは地域の小中学生を対象に、メインキャラクター作成に向けた公募を行う。
- ・その後の展開として、メインキャラクターの家族や友達といったサブキャラクターの作成に向けて、大人世代など多様な公募方法を検討する。

公募キャラクターのコンセプトを決める

- ・公募の実施に向けて、地域の特色やイメージを中心メンバーで共有し、キャラクターのコンセプトを決定する。
- ・キャラクターは、作成後の活用方法を想定し、様々な場面で柔軟に活躍できるように汎用性の高さを大事にする。

💡 STEP 3

キャラクター案を公募する

- ・決定したコンセプトや公募方法・公募対象をもとに、ご当地キャラクターの案を公募する。

キャラクター案を選定し、案を元にご当地キャラクターを作成する。

- ・住民参加型の投票などによって、集まったキャラクター案の中からご当地キャラクターを選定する。
- ・選ばれたご当地キャラクターは、地域のデザインに長けた方に協力してもらい、清書をしてもらうことで完成させる。

💡 STEP 4

キャラクターの活用アイデアの検討

- ・完成したご当地キャラクターは、他のプロジェクトと連携しながら、活動やイベント周知時の、チラシや案内板での情報発信といった機会に活用していく。

当日挙がったその他のご意見やアイデア

- ・生真面目でおおらかな、日本人らしい特徴をキャラクターの中で表現したい。
- ・イラストだけではなく、キャラクターの性格や特技を考えるとより楽しくなると思う。
- ・公募する際は、キャラクターをどのような場面で活用するかを示してあげることが重要だと思う。

公園や空地を活用した『子ども』×『防災』イベント

目的

- ・防災をきっかけとして、住民一人ひとりが地域により関心を持てたり、関わったり交流できる機会につながっていきます。
- ・いざという時（災害時）に、地域の避難所の運営を住民たちで行えるようになるような地域力を育みます。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

関心のあるメンバーで集まり、企画の全体像や将来像などを話し合う

- ・防災や子ども・子育て支援、多世代交流などに関心のある人や関係者が、円卓会議の様な場を活用して話し合いの場を設ける。
- ・話し合いの場では、防災のことだけでなく、この取組を通して将来的にどのような地域になってほしいかといったゴールまでを含めて、話し合いと共有をする。

アイデア！

風水害はある程度予測が可能なため、地震に設定するとよいかも

参考情報

草加市子ども会育成者連絡協議会による学校での防災キャンプや、「高砂住吉中央地区まちづくり市民会議」などでの類似事例を参考にする

💡 STEP 2

防災イベントの対象者像やこだわりポイントなどを具体化する

- ・STEP1 で集まったメンバーを中心に、子どもが楽しめる内容で、かつ地域の様々な世代（子育て世帯だけでなく、高年者などを含む多様な世代・立場の人）が楽しめるような企画をつくる。
- ・「不意打ちで電気が消える」「お化け屋敷の様な雰囲気にする」など、子どもの興味を引く内容にする。

「(仮称) 防災キャンプ」を企画する

- ・初回のイベントとして、学校の体育館に親子で宿泊体験しながら避難所の生活を疑似体験し、避難所の運営にも協力する「(仮称) 防災キャンプ」を企画する。

必要なモノ・コト

実施するにあたっての、安全管理（ケガ等の予防）を事前に検討する

💡 STEP 3

「(仮称) 防災キャンプ」を実施する

- ・「(仮称) 防災キャンプ」を小学校の体育館で、その他の関連する防災イベントは公園や柳島治水緑地等を活用して実施する。実施にあたっては、地元の学校（避難所）や避難所運営委員会等とも連携して行う。
- ・防災イベントを通して、災害時の避難所運営のトレーニングや検証も行う。

💡 STEP 4

防災イベントを振り返り、活動をさらに継続・発展させる

- ・実施に関わったメンバーや、学校や避難所運営委員会などの関係者が集まり、イベントの参加者層や感想、交流や地域への関心の高まりにつながったか、実際の避難所運営に向けての検証といった視点で振り返りを行う。
- ・「(仮称) 防災キャンプ」をシリーズ化するなどして、一回限りのイベントに終わらせず、継続的な開催につなげる。

当日学がったその他のご意見やアイデア

- ・避難所となる地元の小学校や避難所運営委員会と連携して企画していきたい。
- ・「いざという時には自分たちで避難所を運営するんだ」という意識につながるとよい。
- ・防災イベントは、防犯などのより身近な地域課題に気づき、まちに関わる入り口（きっかけ）になる。

安全なまちを目指した地域の見守り運動

目的

- ・ 駅を利用する人、住んでいる人にとっての安全・安心のために、見守り運動を推進していきます。

プロジェクトの内容

💡 STEP 1

夜間ライト点灯による見守り運動の企画する

- ・ スマートフォンや懐中電灯などのライトを点灯しながら、夜間歩くことで、まちなかの見守り運動をする「(仮称)ホテルの安心・安全運動」を企画する。
- ・ 小中高生が塾の帰り道などに安心して帰れるように夜間の時間帯で検討する。時間帯と対象を決めることで、協力してくれる団体等を決めやすくする。

アイデア！

一人でライト点灯をしても防犯にはつながらない。多くの方に参加していただけるように、誰でも参加できる取組みから始める！

💡 STEP 2

取組内容を周知・協力者を募る

- ・ 町会や学校、地域活動団体などに協力を仰ぎ、企画の実現を目指す。
- ・ 駅前などでチラシを配り、SNSなどの活用により、企画を周知し、協力者を募る。

💡 STEP 3

夜間ライト点灯による見守り運動を実施する

- ・ まずは期間を定めて、一定期間実施する。
- ・ 「なんでみんなライトをつけているんだろう」「こんな見守り運動をやっているんだ」と疑問に思ってもらい、興味を持ってもらうことで、地域の防犯につなげる。

💡 STEP 4

効果確認・改善・体制の構築する

- ・ 協力者や地域の意見を募り、効果を確認・改善する。
- ・ 協力者と連携しながら、継続的な実現に向けた検討を行い、体制を構築する。

当日拳がったその他のご意見やアイデア

- ・ 以前の活動の取組の状況を把握することも重要ではないか。
- ・ チラシやサンドイッチマン(胴の前面と背中とに広告看板を取り付けて)で、取組の周知をすることも重要ではないか。
- ・ 見守り運動の効果の検証が難しい部分があるのではないか。

第5回地区別懇談会のご案内

2月17日（金）18：30～に開催する第5回地区別懇談会は、

以下の内容で実施する予定です！

①モデルプロジェクトの報告

第4回地区別懇談会で選定した2つのモデルプロジェクトについて、実施結果の報告を行います。

②コミュニティプラン（素案）の説明

これまでの検討結果をもとに、現時点での「草加西部地区コミュニティプラン（素案）」を作成しましたので、内容についてご説明します。

③各プロジェクトのとりまとめ

これまでの検討結果を踏まえて、プロジェクトの最終確認を行います。